

公共性を問い直す

ー民主主義とコンセンサスの危機についてー

第4回 公共圏の拡大浸透ーアーレントを手掛かりに

講師：小谷英生（群馬大学准教授）

目次

第1回 なぜ公共性が重要なのか

第2回 公共性とコモンセンスの概念整理

第3回 カントの公共性を解釈する

第4回 公共圏の拡大浸透－アーレントを手掛かりに

今回の内容

最終回では「公共圏」の拡大浸透というテーマに戻ろうと思います。

第1回の次のスライドをもう一度振り返ってみましょう。

公共性の危機

- ・「公共圏」の拡大浸透と、公／私の曖昧化

ネット空間でヘイトを垂れ流すことはモラルに反しますし、最近では法整備も進んできたので法にすら反します。とはいえ「コンプライアンスだらけで息苦しい」という感情も、まったく根拠のないものではありません。

少し前に芸人の岡村隆史さんの深夜ラジオでの発言が炎上しました。発言内容を擁護することはできませんが、深夜の「ノリ」がネットニュースやSNSを通して白日に晒されてしまうというのは、少し恐ろしく感じました。

私たちは自分の発言がいつどこでどのように暴露されるか分からない時代を生きています。楽屋（バックヤード）や飲み会でのプライベートな会話も、SNSなどを通じて公共性の審判にさらされる時代、とも言えます。そういえば出川哲朗さんも過去の言動が暴露されて炎上していましたね。

岡村さんも出川さんも性差別的な言動が問題になりました。インターネットの発展によってこうした告発ができるという点では健全な社会に向かっているとも言えますが、裏を返せばヘイトが溜まりやすい社会にもなっているように感じます。

私的領域／公的領域

ところで、「公共圏」の社会全体への拡大浸透という議論が可能だとすれば、そもそも「公共圏」は**限定された領域であった**といえます。

先週学んだカントの理解においても、「公共圏」は**私的利益追求を離れ、公共の利益を追求する公平で理性的な市民**の領域でした。

これは経済社会（私的利益追求の領域）でも政治社会（国家行政の領域）とも、私的生活領域とも異なる第四の領域です。

私的領域／公的領域

ひとまずここで、H・アーレントの議論を参照しましょう。

アーレントは古代ギリシャをモデルとして、公的領域と私的領域の原義について次のように説明します。

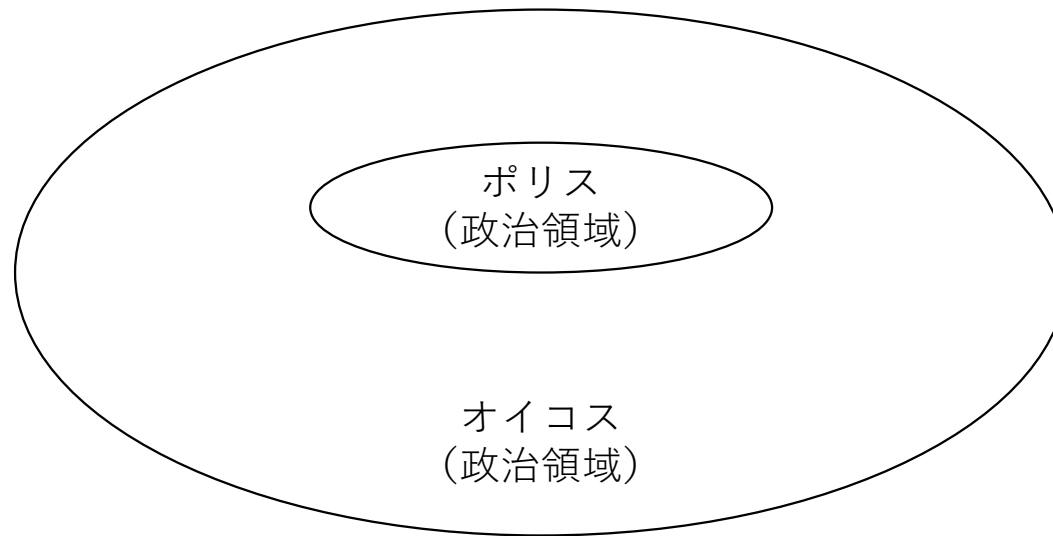
ポリスとは外壁に囲まれた市民の領域であり、そこで行われていた事柄（ポリテイア）が政治（ポリティックス）です。

私的領域／公的領域

ポリスの外にはオイコス（家）が広がっており、そこでは奴隷が労働に従事していました。

オイコスの領域で行われていた事柄（オイコノミア）が経済（エコノミー）です。

私的領域／公的領域



ポリテイア→ポリティックス、オイコノミア→エコノミーというつながりを考えると、政治参加者を**市民**（＝**市場の民**）と呼び、オイコノミアを**家政**（＝**家の政事**）と呼ぶ日本語は、何となくちぐはぐですね。

私的領域／公的領域

アーレントのいう公的領域、公共圏とは、経済から独立した領域として理解されていました。

古代ギリシャにおいて公共圏に参加できる市民は、奴隷を含む財産を持ち、労働から解放された（つまり生活の心配をする必要のない）市民でした。

私的領域／公的領域

ところが、近代に入ると、公的領域／私的領域の区別は曖昧になり、消滅していきます。

ここでは**ポリティカル・エコノミー（ポリス的オイコノミア）**というかたちで、政治が経済に従属するようになっていきます。現代でも政治の主要な仕事は経済の維持・発展だと考えられていますね。**生命と生活の維持はオイコスの課題だったのですが、近代以降、ポリスの課題となっていた**のです。

私的領域／公的領域

18世紀末という時代にあって、カントはなおも私的利害から離れた理性使用が可能であるし、人々は自由さえあればそうした使用を行うはずだと想定することができました。

しかし、ペシミスティックな見方をすれば、19世紀以降、このような理性使用は困難になっていきます。国会答弁を聞けばわかるように、「公共圏」は利益代表者が自己利益追及を行う場、利害調整と自己弁護の場となっていたわけです。

* より詳しくはハーバマスの『公共性の構造転換』を参照してください。

インターネット社会：公共性の拡大浸透

実業家であれ政治家であれ学者であれ、「公共圏」のアクターは一種の公人という性格を持っていました。**インターネットの発達をもたらしたのは、私人／公人の区別の曖昧化です。**

SNSやYoutubeでは誰でも発信することが容易となりました。それは名声と経済的利益をもたらし、政治的影響力さえ持つようになってきました。コンプライアンスを敢えて破る炎上商法のようなものも、出現しました。

私生活を公開することが容易になり、それがコミュニケーションの一種となりました。ふとした瞬間が切り抜かれて拡散されることさえあります。そうになってしまうと一度の過ちは、ネットタトゥーとして半永久的に残り続けることになります。

インターネット社会：公共性の拡大浸透

ちょっとした発言や写真の映り込みがモラルや常識に反していると、鬼の首を取ったように攻撃する人もいます。これは当事者を「公共圏」から追放する結果（アカウント削除など）になることが多く、公共性のモラルという観点からみれば本末転倒です。

政治家や大企業役員のような重要な社会的地位に立つ人間であればいざしらず、アイドルやスポーツ選手、人気発信者や一般の高校生大学生に対してまで激しい攻撃を加えるのは、説明責任の多寡という観点からみて首を傾げざるをえません。

インターネット社会：公共性の拡大浸透

すべてのものが公開されうるし、公共性のコードによって裁断される時代。公共性そのものが暴走しかねない時代。

それが、現代社会の特徴の一つであると考えます。

インターネット社会：公共性の拡大浸透

とはいえ、本連続講義で確認してきたように、「公共圏」を無駄なコストだとする議論は権力濫用を容認し、真理の追及を阻害する結果になりかねません。

また、そもそも私たち一人ひとりが社会の中で自由・平等・公平に扱われ、誰にも従属することなく思考し生きるためには、公共性は重要な概念です。簡単に捨てることはできません。

インターネット社会：公共性の拡大浸透

ではどうすればいいのか。これは本当に難しい問題です。

公共性の本来の目的を理解したうえで、適切な活用をしていくことが重要であると、ちょっと月並みなまとめで、本講義を終えたいと思います。

どうもありがとうございました。

参考文献

- ・ハンナ・アーレント、清水速雄訳、『人間の条件』、ちくま学芸文庫、1994。
- ・ユルゲン・ハーバマス、細谷貞雄・山田正行訳、『公共性の構造転換〔第2版〕』、未来社、1973。
- ・日本アーレント研究会（編）、『アーレント読本』、法政大学出版局、2020。
- ・百木獏、『嘘と政治: ポスト真実とアーレントの思想』、青土社、2021。